韓さんのこと

池谷　薫
（番組制作会社　蓮REN代表）
'82年大学文学部文化学科
美学及芸術学専攻卒業

韓さん。あなたのりんごの木はあれからどうなりましたか。あなたが無理をして手に入れたリンゴの木は、茫漠と広がる黄土高原にちょっと小振りな赤い実をちゃんとつけていますか。

あの日、別れの時、「三年経ったら又来てくれ。俺のリンゴをたらふく食わしてやる」と、あなたはアバタ顔をくしゃくしゃにして豪語しましたね。

あれから四年の月日が流れました。

韓さん。あなたのリンゴの木、今もあなたのものであり続けていますか。

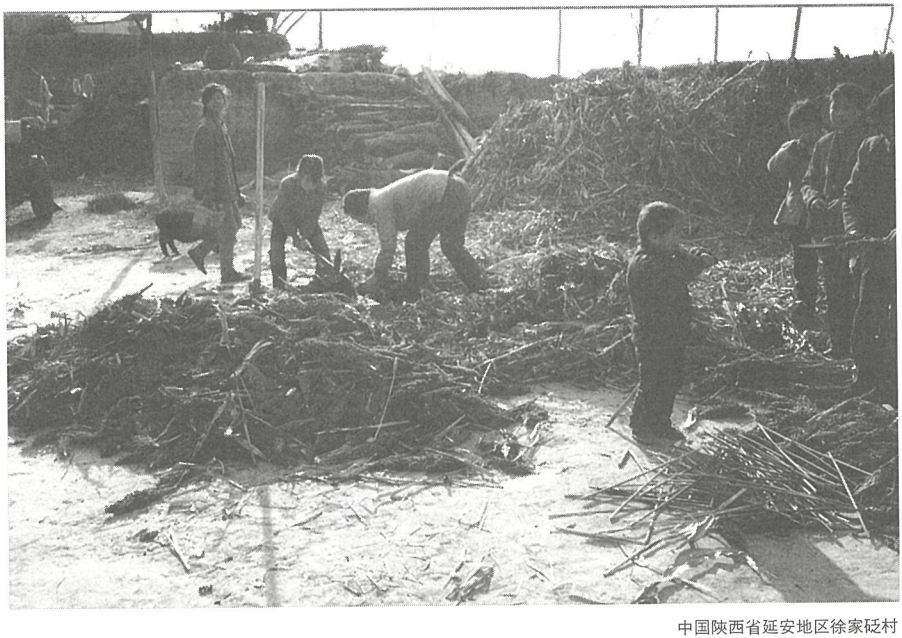
＊　＊　＊

一九九二年の初冬、私はNHKの特別番組の取材のため、中国陝西省北部の延安地区に二か月余り滞在した。改革開放政策下の農村地帯に何が起きているのかを記録するためであった。

延安は、かつて若き日の毛沢東率いる共産党軍（紅軍）が、国民党と戦いながら一万二千キロを踏破して辿り着いた〝長征〟の終局地であり、中国革命の聖地といわれている。しかし、六十年後の今、かつての栄光の地は中国でも最も貧しい地区の一つに数えられている。月の砂漠を思わせる土塊が、うねりとなって果てしなく続く黄土高原。夏は摂氏四十度、冬はマイナス二十度を超す過酷な大地に、人々は窰洞（ヤオトン）と呼ばれる横穴式住居を作り暮している。アワ、ソバ、じゃがいも、この土地がもたらす恵みは限りなく乏しく、現金収入に至っては沿海都市部の十分の一にも満たない。

こんな延安地区にも、ようやく改革開放の波が押し寄せてきた。私が訪れた子長県の徐家砭村では、農地を競売にかけるという極めて実験的な試みが政策として行われることになったのだ。正確には土地の使用権の分譲であるが、〝土地は国家のもの〟という社会主義の大原則にメスが入れられたのである。

オークションで土地を買う。毛沢東の時代、集団で土地を耕し、収穫を分け合ってきた農民には衝撃的なできごとであった。



中国陝西省延安地区徐家砭村

私が韓さんと初めて出会ったのは、競売地の測量が行われた時だった。

「やめろ！測るな！この土地は誰にも渡さねえ」

突然の怒鳴り声に振り向くと、測量を行っている役人に武者振りつく、その人がいた。

競売地は棚田のように上から二段ずつ七つの区画に分けられていたが、韓さんは、その一区画を請け負っており、自分の金でリンゴの苗木を植えていた。韓さんが競売でこの土地を優先的に与えられる保証は何もない。そればかりか、もし土地が他人の手に渡った場合、リンゴの苗木も手放さなければならない。

「幹部が植えろといったから植えたんだ。リンゴをやれば儲かるなんて言われてな。なのに今度は土地を取り上げ競売にかけようとしている。そんな事は絶対に許さねえ」

韓さんの怒りは、平等を建前に国の建設を進めてきた中国の、新しい矛盾を物語っていた。

韓建有さんは、当時四十八歳。妻と二男一女、そして二人の孫がいた。八人兄弟の次男だった韓さんは、父親が解放戦争で片足を失ったため、幼い頃から極貧の暮らしを強いられてきた。

韓さんは、自分が吸っているたばこの銘柄がわからない。文盲なのだ。奥さんは関節炎を長く患っており、改革開放になってからも暮らしぶりは一向に良くならない。三年前から農閑期に出稼ぎに行くようになったが、それまでは現金収入はほとんど無かったという。韓さんは、ようやく手にしたリンゴの苗木に将来を賭けていた。

韓さんには、競売で彼の土地を狙っている強力なライバルがいた。

その人の名は李躍忠。三十八歳の彼は、最初にタバコの栽培を始めた村一番の金持ちだ。タバコは害虫の駆除や乾燥など手間がかかるが、単位面積あたりの収益は群を抜いている。

この地方でも十五年前から農家請負制が始まり、農民たちは一定量の収穫を国に納めれば後は自由に売りさばけるようになった。やる気と才覚のある人は存分に金を儲けることができるようになったのだ。その代表選手が李さんだった。

「競売に出された土地は、全部俺が買い占めてやる」

村の役場でタバコを卸し大金を手にした李さんの顔は自信に満ち溢れていた。

一方、韓さんは、いまだに家族が食べる分の穀物しか作っていない。アワ粥とじゃがいもを粉にして蒸した饅頭だけの夕食。

韓建有さんと李躍忠さん。改革開放の十五年は、同じ村の中に実に三十倍もの収入格差を生み出していた。

競売を一週間後に控えた徐家砭村では、連日集会が持たれ、村人同士が牽制し合っていた。

「李さんよ、どのくらい土地を買うんだい」

「村ごと買ってやらあ」

「何なら、村の人間も全部買ってみなよ」

様々な思惑が絡み村が割れていく。

競売に断固反対している韓さんは、前後左右に身を乗り出し、何事か喚いていた。

「買い占めは絶対にさせねえぞ」

村人の中に、競売に積極的な李さんに、しきりにつっかかる老人がいた。李さんがすかさず応酬する。

「おまえにもな」

集会所に大きな笑い声が起きた。その老人は、李さんの実の父親だったのだ。

李躍忠さんは七人兄弟の長男だが、意見の合わない父親とは別れて暮らしている。彼は夜間学校に通って新しい農業技術を身につけていた。集会の翌日、李さんは競売地となった韓さんの土地を下見に訪れた。リンゴの苗木に手をやりながら李さんが言う。

「ここの管理はひでえもんだ」

李さんが下見を続けている頃、村人たちは協力して道路の補修工事にあたっていた。この村では一家族につき年間三十日、勤労奉仕を行う義務が課せられている。

作業中、韓さんが村の党書記に呼ばれた。道端にしゃがみこみ話し込む二人。家に帰る途中、韓さんに聞いてみた。

「書記はこう言った。買うのか、買わないのか。買わなければ、他の奴にお前の土地を奪われてしまうぞ」

事件はその直後に起きた。何を思ったのか、李さんが韓さんの家を訪ねたのだ。孫を抱いた韓さんに近寄る李さん。吠え立てる犬、一瞬の睨み合い。韓さんの顔が紅潮していく。しかし韓さんは一言も発せず、窰洞の中へと消えていった。

韓さんの土地を狙っているのは李さんばかりではない。開放

中国陝西省延安地区

経済になり、内陸部のこの村でも豊かな暮らしへの憧れは押さえ切れないものになっていた。この土地を手にすることは、やっと訪れた夢を実現する第一歩なのだ。

暗い窰洞の中で韓さんが呟いた。

「こんな金じゃ足りねえな。食いぶちを売るしかねえか」

韓さんは競売にのぞむことを、ようやく決意したのだった。

告示から三週間。競売が行われる日がやって来た。

この日、韓さんはなけなしの金を手に会場となる村の人民政府に姿を現した。

競売は斜面の上から順番に、第一区画から第七区画まで次々と行われていく。競り合う価格は土地の一年分の使用料で、契約期間は五十年。実際には、その五十倍を支払わなければならない。

奇妙なことに、全部買い占めると豪語した李さんの手が挙がらない。そして第六区画。

十元、十三元、十七元、二十元。その時、一人の男が声を荒げて言った。

「十元、二十元なんてケチなこと言うな。いい土地なんだから、もっと高くつけろ！」

「今までの最高値はいくらだい？」

李さんがこの日初めて口を開いた。

「じゃあ五十二元で俺が買った」

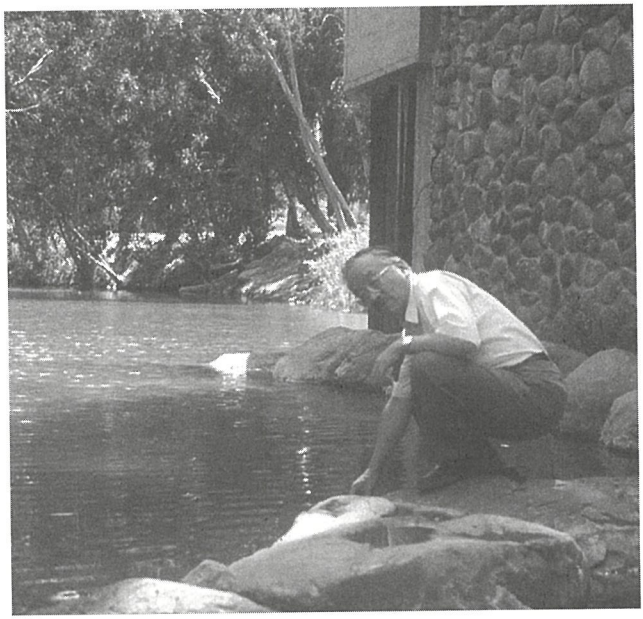
「李躍忠に決定！」

李さんが、あっさりと第六区画を競り落とした。落札価格は、

五十年分に換算すると村人の平均年収の七倍に当たる。
そして第七区画。韓さんが請け負っている土地の番だ。初めに口を切ったのは韓さんだった。
「十四元！絶対に誰にも渡さねえ」
すかさず李さんが値を上乗せする。
十五、十六、十七…二十四、三十二、三十七…。歯を食い縛って値をつり上げる韓さんに、李さんは涼しい顔で応戦してゆく。まるで韓さんをもてあそぶかのように。
四十六、四十七。四十八、四十九。ここで韓さんが切れた。
「この、くそったれが。いくらであっても俺のもんだ！どんな手を使っても、おまえになんて渡さねえ、取られてたまるか！金が足りなきゃなあ、食いぶちを売ってでも、出稼ぎに行ってでも、何が何でも手に入れてやる」
「じゃあ、おまえが買え」
一瞬の間の後、李さんが放った言葉に私は唖然とさせられた。あれほど意欲を見せていた李さんが、競売を降りてしまったのだ。
「決定！第七区画は韓建有」
すべての競売が終わり、その場で契約が交わされた。支払いは、原則的には五十年分の一括払いだが、その金を用意できない人には一年ずつの分割も許されていた。
李さんは預金通帳を取り出し、五十年分を一括払いした。
放心状態の韓さんに私は近づき、そっと聞いてみた。
「いくらで買ったの？」
「…忘れた。おい、いくらで買ったんだっけ」
韓さんが競り落とした自分が請け負っている土地の値段は、彼の年収十年分を超えていた。
村人が引き揚げた後、私は李さんを呼び出し、なぜ競売から突然降りたのか、そのわけを聞いてみた。
「今日、韓の土地を買っても、無理難題をかけられるばかりで、後々面倒な事になると思ったんだ。むしろ今日は、あいつに買わせようと思った。あいつには土地を管理する能力なんてないから、結局俺に買い取ってくれと言いに来るに決まっている」
「じゃあ、なぜ値を競り上げたの？」
「俺が値をつり上げれば、他の奴らはついてこれない。韓建有は単細胞だから、食らいついてくるに決まっている。高値になればなるほど、後の支払いに苦しみ、手放す時期が早まるってわけだ」
私は李さんのこの言葉に驚くばかりだった。
競売が終わって三日目の朝、韓さんは落札した土地代を支払うため、出稼ぎに行くことになった。韓さんは、将来、息子や孫たちが出稼ぎに行かなくても済むようにと無理をして土地を買った。しかし、その支払のためには出稼ぎに行くしかないのだった。
着替えを詰めたバッグを両手に下げた韓さんに、黄土高原の冷たい風が吹きつける。私は、人民服を来た彼の背中が遠ざかるのを、いつまでも、いつまでも見送り続けた。

イスラエル紀行

小池基信
（国際中学・高等学校教諭）



ヨルダン川で水をくむ

一九九六年八月イスラエル訪問の機会を与えられ、六泊七日の日程で旅をした。祖父も父も行っているので、何時かは訪ねたいと思っていたのである。聖書は多少かじってはいるが、イスラエル建国とパレスチナ問題についての知識と姿勢について多少の準備もした。最初は聖書科の教師の研修で応募したのだが、人数が集まらなくて中止になってしまった。準備もしていたので、旅行社に尋ねると、同じ日程で現地集合で日本人ガイドがつくツアーがあると知らされ、それに参加することにした。

大阪―パリ―テルアビブのルートを選びエルサレムのホテルで他の参加者五人と合流。マイクロバスのイスラエル人運転手、イスラエル在住二五年、ヘブライ大学で学んだ榊原ガイドと我々六人の旅が始まったのである。

イスラエル建国の父と言われシオニストのテオドール・ヘルツェルと暗殺されたラビン首相の墓地公園を訪問した後、歴史博物館に行った。

ヤド・バシェム―ユダヤ人虐殺の歴史博物館―

子供博物館―入り口の所に途中から折れたような、途中で工事を中断したようなコンクリートの柱が数本立っているのを見て不思議に思い尋ねてみた。六〇〇万人中一五〇万人の子供が虐殺された。人生これからというとき無残にも命を奪われた象徴として建てられた記念碑であるという。館内の入り口にはかわいい子供達の生前の写真が飾られている。ホールは暗闇の中五本のロウソクが、全館に張り巡らされた鏡に反射して一五〇万人の子供の霊を表している。てすりに沿って歩き始めると、子供達の一人一人の名前と出身地と年齢がヘブル語と英語で静かに読み上げられていく。胸が締め付けられる思いだ。展示物も何もない唯子供達の名前を聞き歩くだけなのだが、強烈なメッセージを与えられた。

歴史館は一九三三年から一九四五年までのナチズムの台頭から強制収容所の模様を年代順に新聞、写真、証言などで展示してある。一九九五年にミュンヘン郊外にある「ダハウ収容所」を訪ねた事を思う。

外に出て杉並木の道を歩いていると、一つの記念碑があった。元リトアニア、カウナス領事であった杉原千畝氏を記念するものであった。「異邦人の中にも義人はいた」と書かれていた。

イスラエル博物館―死海写本館―

遠くから見るとタマネギのように見える屋根。死海写本が入っていた壺の蓋の部分をイメージしたものらしい。一九四七年

ヤド・バシェム 子供博物館の碑

夏死海西北の小高い洞窟でベドゥインの羊飼いの少年が石を投げていて発見した聖書の写本が展示してある。B.C.二―三世紀に筆写された今日発見されている聖書の中で最も古いものと言われており、イザヤ書や詩編など六〇〇を越える巻物がほぼ完全な形で発見されたという。室内温度も洞窟と同じに調節されている。

エルサレム旧市街

旧市街を囲んでいる城壁は、一五三七年―四一年にかけて支配したオスマン・トルコのスレイマン一世によって再建されたもの。シオン門のすぐそばにダビデの墓があり、その建物の二階がイエスの最後の晩餐の部屋とされているが、がらんどうなのでむしろ真実味があった。シオン門からはいり、アルメニア人街を通りユダヤ人地区に出る。カルドと呼ばれるショッピング・アーケードは、ローマビザンチン時代を通じてエルサレムのメインストリートだった所。その中に古代ローマ式レストランがあり、そこで食事をした。店内に入ると古代ローマのいで立ちをした店員がファンファーレを奏でて歓迎、客の頭に月桂樹を乗せ白い衣装を着せてくれる。当時は寝そべって食べたのだがテーブルであった。女性の店員は柄の長いウチワを持って扇いでくれる。二〇〇〇年前ユダヤがローマに支配されていた時代への回帰体験なのだが、わたし自身は複雑な思いで食事をすることになった。

ガイドの榊原さんは我々を一般観光客として案内していたのだが、わたしが時々質問したりするので「小池さんはよく知ってますね」と言われたので、「いや、ちょっと聖書をかじってます」と答えたのである。それからは予定にないのだが、と言っては横道に入り「ここはイエスの――」と言った具合になってきた。時には新共同訳の聖書を用いながら説明していた。「聖書をかじっている割りにはよく知っていますね」「いや、実は聖書を教えているんです」「それでは、かじっているのでなく食べているんだ」みんな大笑いになり俄然打ち解ける仲間になった。

神殿西の壁（嘆きの壁）

ソロモンが完成させた巨大な神殿は、新バビロニアによって崩壊した。バビロン補囚から帰って来た人々によって再建され、ヘロデ王が第二神殿を建てた。それもA.D.七〇年ローマ軍によって壊された。そのときに残ったのが神殿を囲む西側の外壁の一部である。離散したユダヤ人は神殿の崩壊を嘆き悲しみ祖国の回復を祈って来た。安息日には写真が撮れないので、前日に訪れた。壁に向かって左が男性、右が女性と決められている。キッパと言う紙製の小さな帽子を借りて入るのだが、野球の帽子でも良い。現在も神殿の周囲は発掘中である。

ビア・ドロローサ（悲しみの道）からゴルゴダの丘（聖墳墓教会）

西の壁からトンネルを潜ると細い石畳の道の両側に石造りのイスラム人商店が立ち並んでいる。喧噪の中を歩いて行くと、第三ステーションの標識が刻まれている。イエスが最初に倒れたところと言われている。しばらく坂を上るとクレネのシモンがイエスの十字架を担いだ地点を経てゴルゴダの丘（聖墳墓教

会）にたどり着く。この教会はカトリック、アルメニア、コプト、ギリシャ正教会が管理しているが、毎朝開門するのはアラブの少年だそうだ。

オリーブ山からゲッセマネの園、神殿を眺望

マルコ福音書13：3に「オリーブ山で、宮に向かって座っておられると」イエスが弟子たちと壮大な神殿を眺めておられた事を想起させる風景である。急な坂道を降りるとそこはゲッセマネ。最後の晩餐の後、ここで弟子たちを待たせて一人イエスは祈っておられたが弟子たちは眠りこけていた。過ぎ越の祭りの夕食は夜遅くから始まり祝いのそれであったので、ブドウ酒を飲み腹一杯食べた弟子たちは睡魔と格闘していたに違いない。

ケデロンの谷を通って再び西の壁の横の階段を上がり二つのイスラムのモスクを見学した。わたしが帰国した直後このモスクに通じるトンネルを巡って民衆とイスラエルの軍隊が衝突したのである。

シオンの門の東の松林に囲まれた丘、大祭司カヤパの屋敷跡に鶏鳴教会がある。イエスが通ったと言われる石段が今も残っている。教会の地下は牢獄で留置された場所とされている。

ベツレヘム

エルサレムのすぐ南にあるイエスが生まれたとされる馬小屋であった洞窟のうえに聖誕教会がある。正面の祭壇はギリシャ正教会で司祭達が聖歌を歌っていた。地下に行く階段を降りると洞窟があるが、それがイエスが生まれた馬小屋であるらしい。カトリックの地下室には、ヒエロニムスが旧約聖書をラテン語に訳すために（ブルガタ聖書）こもっていた洞窟があった。気づいたことは、エルサレム周辺は、とにかく岩と石と洞窟が多いと言うこと。ほとんどの教会が岩のうえに建っているし地下は洞窟となっている。もう一つは水利施設が地下水を利用していること。ベテスダの池など地下水でつながっているそうだ。

ベツレヘムを夜通った友人によると、真っ暗な夜空に光る星の美しさに感動し、イエスが生まれたときもこのような夜であったのではないかと言っていたのを思い出した。

ナザレ、カナンを通ってガリラヤへ

ナザレは現在イスラエル最大のアラブ人の町であるがその中にマリヤの受胎告知教会がある。一九六九年に完成した中近東最大のカトリック（フランシスコ会）教会である。二階には世界各国から贈られた母子像の絵がかけられている。日本の長谷川氏の作品もある。カナンを通ってガリラヤ湖畔ティベリヤの町を通る。水浴や船遊びをする人々の車で反対車線は大渋滞。カペナウムを通り、ガリラヤ湖に注ぐヨルダン川を渡り、ゴラン高原の宿舎に到着した。

緑の山々に囲まれ、対岸のティベリヤをはるかに望み、広告やネオンの光も、車の騒音もなく静寂の中に夕日が静かに沈んで行く光景は感動的である。「ガリラヤのうみべ山緑に」「ガリラヤの風香るあたり」思わず賛美歌を口ずさんでしまう。問題のゴラン高原はずっと北のシリヤとの国境近くであるらしい。

朝からカペナウムの遺跡を訪ねた。現在も発掘中で一・五キロメートル、幅が四〇〇メートル位の町であったと想像される。この辺りは昔火山活動があった所で、玄武岩が多い。イエスが度々教えられたというシナゴグもそれでできている。ペテロの家があった所は湖からすぐの所で大きな網元の家であったと推測される。また小麦、大麦、葡萄、無花果、ザクロ、オリーブ、ナツメヤシの七つの産物が彫られた石やオリーブの実を搾る石が残っている。

湖面に降りて船に乗り、イエスが復活された場所、山上の説教の場所などを眺望する。湖岸から少し坂道を上るとなだらかな丘があり、今度はそこからガリラヤ湖全体を見ることができる。群衆が座ってイエスの話に耳を傾ける静けさと空間がある。そこにも教会が建っているが、何とも目障りである。ドイツからの観光客の一団が礼拝をしていた。我々もガイドの榊原牧師が（このことは最後に別れの挨拶のとき名刺を交換して初めて分かったこと）聖書を読み当時をしのんだ。少し車で行くとタブハと言う村に出る。そこは五つのパンと二匹の魚の奇跡を起こした所と言われ、三五〇年には教会が建てられていた。床にはビザンチン時代の魚のモザイクが鮮やかに残っている。

エリコを通って死海西岸エイン・ボケックへ

エリコはエジプトから脱出したイスラエル人が、ヨシュアに率いられてラッパを吹いて城壁を壊したことで有名である。また、取税人ザーカイがイエスと出会い改心した所でもある。一九九三年以降ガザ地区と共にパレスチナ人自治地区になってい

カペナウムのシナゴグ跡

ガリラヤ湖上から
山上の説教の丘を望む

クムラン洞窟

る。ヘロデの冬の宮殿、イエスが悪魔に試みられた誘惑の山を眺めながら一路死海西岸を南下。左手に死海、右手に荒涼たる山が続く。途中車が止まった。山の中腹に二つの洞窟が見えた。これこそイザヤ書の写本が発見されたクムランの一番目と二番目の洞窟である。エイン・ボケックのホテルに到着。ここでは何と言っても浮遊することである。砂浜があって波打ち際はもう一面の塩遠浅になっているが、底はもちろん塩。腰の当たりの深さで後ろに両手を広げて倒れると、体はぷかりと浮いた。両足を水面から高く上げても浮いている。海水の感触はぬるぬるである。髭ソリの後がぴりぴりと滲みる。うつむいて普通に泳ごうとしたのだがバランスが取れなくて引っ繰り返りそうになる。海水を飲んで肺にでも入ろうなら大変なことになるそうだ。特殊な微生物は別として生き物はいない。ボートや船は見当たらない異常な光景であった。

ガリヤラ湖の水、ヨルダン川の水、死海の水、それに〝ロトの妻の話〟の塩の山で、塩の結晶を採取して持ち帰った。ヤッフォ（ヨッパ）を最後にイスラエルの旅は終わった。